

神田由布子

a tree

木よ

やがてきみは新たないのちの実を落とす

ある日風に吹かれてこの庭に

あるいは鳥やヒトに運ばれて

数千キロの旅のはて

出会った大地に根をおろし

仮眠から目をさます

楽園であれ 荒野であれ

生きのびる

地球を手中におさめているかに見える傍若無人な者たちのそれ

よりも

はるかにねばりづよい生命

じつは私たちはきみの手中にあることも知らず

チタンのノートを得意げに開いてあらゆるものに値あたをつけ

海をよごし宙そらの支配をもくろみ

森を見捨てて

キリンの首のように細長いビルの高層階で

森の再生を論じている

かたやきみの根っこはどこまでも広く深く

マグマの領域まで張るいきおいだ

ある日ビルが崩落してもきみはきつと

粉塵が舞う空にひろびろと枝をひろげて

人間の愚かな顛末を黙って見おろしているだろう

不平もいわず脅しもせず

ただ愚直にそこに立ち

静寂を養分に己の生きるを生きている